

長野県埋蔵文化財センター

No.14

1985. 7. 1

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑 調 査 事 務 所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



蒜 田 遺 跡

飯田市教育委員会 小林 正春

飯田市竜丘は、県下でも有数の古墳密集地で、特に桐林塚原はその名のとおり古墳が集中分布している。

塚原は、現天竜川との比高差40mの中位段丘で、その西方に約15mの比高差をもって蒜田地籍の段丘面がある。蒜田段丘面は小沢の開析により、段丘端部が大小4か所の舌状の尾根となっている。

南端の尾根端部には径約30mの円墳があり、北隣りの尾根上に今回調査の遺構が発見された。それは尾根端部の傾斜が始まる付近に一辺15mのほぼ正方形に幅1～2m、深さ1～0.3mの溝で区画されている。

溝壁内側は、人頭大から拳大の礫を貼り付け、壁面

すなわち墳丘面を形成している。

墳丘は、傾斜地という立地条件のため旧地表面の把握に若干の疑問点もあるが、土層状態から中央部付近で約40cmの盛土があり、周囲より若干高い施設であったと思われる。

内部主体は、中央部に長方形の土壇2基があった。

出土遺物には、溝内より小形埴1点と中島式土器片・石器があり、なお、耕作者の言によれば以前耕作時に鉄の刀が出たという。

立地条件、形状等総合的にみて、弥生時代後期の方形状墓の範疇に属すものと判断される。

埋文施設紹介



諏訪市考古資料館

〔建物の概要と環境〕 諏訪市考古資料館は、中央自動車道西宮線建設に先立って発掘調査された諏訪市内14遺跡からの出土品を展示するため、昭和55年1月に開館した。建物は蓼宮神社の舞屋を借り受け、これを改造・一部増築して木造平屋建て、床面積112㎡の展示室・事務室を設けた。事務室の地下には27㎡の半地下室があり、現在これを収蔵庫として利用している。

この資料館は同年に整備されてオープンした諏訪市西山公園の一面を占めている。自然地形を利用してつくられ草木類も豊富なこの公園は、市民の憩いの場として定着しつつあり、休日にハイキングやドライブで訪れた家族連れや、ゲートボールを楽しんだお年寄りなどが考古資料館に立ち寄り、郷土の古代に思いを巡らすことも多い。

また、西山公園は、諏訪盆地西縁山麓の小高い台地上にあるため、ここから見る諏訪盆地一帯の景色はまた格別である。正面には盆地平坦部を挟んで東側の山麓が一望でき、茶臼山・北踊場など上諏訪地区階段状段丘上に密集する旧石器時代遺跡群、盆地に流入する河川の扇状地や山麓の台地上に分布する穴場遺跡など縄文時代中期の遺跡群、標高950m前後の山形小ピーク上に点在する中世山城跡、そして山地稜線の上方には黒曜石産地和田峠に密接して旧石器時代遺跡群が形成されている標高1600～1800mの霧ヶ峰高原を望むことができる。更に左下方には曽根遺跡の謎を秘めて静かに水を湛える諏訪湖、左後方には山地中腹を走る中央自動車道と、諏訪神社上社まで連綿と続く西山山麓遺跡群の景観などを楽しむことができる。

〔展示〕 展示室には各遺跡か



荒神山遺跡出土

ら出土した土器・石器類などが常時展示されている。縄文時代前期から中・近世まで各時代の遺物が、遺跡別・時代別またはテーマ別に整理陳列されている。ケース上の壁面にはパネルを設置して主要遺跡について概説し、発掘の様子や遺物の出土状態の写真も展示している。また、大型のカラー年表パネルによって、諏訪市の原始古代や西山地区の各遺跡の年代や特色を表示して、参観者の歴史的な理解をより深めようと努めている。

特色ある展示品としては、金鑄場遺跡出土の猿投窯産の灰釉水鳥鈕蓋付平瓶、荒神山遺跡出土の豪華な縄文時代中期の土器群、地域の特徴を表わすテーマ別展示としての「漁網錘の変遷」等がある。

現在、土器約120点・石器数百点・金属器数十点が陳列されているが、展示室のスペースが限られているため、これらは中央道関係出土遺物の内ごく一部にすぎない。未展示資料についても展示替えによって徐々に一般公開できるよう努力している。

また、近年の市内の遺跡発掘調査における各時代の出土遺物も膨大な量にのぼっており、展示可能な資料も数多く蓄積されている。これらについての整理作業が仮設の整理室では処理しきれず、時には考古資料館の事務室において土器の復元や石器の実測などを行うこともある。これは、見学者にとってガラス越しでなく遺物を見ることができたり、整理の方法を理解できたりするというので、意外と人気が高く、「この博物館は生きていますね。」などと賞賛されることもしばしばである。



展示室

〔文献〕 ●パンフレット「西山の遺跡」(¥300 円) ●報告書「諏訪市の遺跡」(¥1,500 円)・「唐沢」(¥500 円)・「穴場Ⅰ」(¥1,500 円) ●その他「諏訪市の文化財」(¥600 円)等

所在地：諏訪市湖南 北真志野7230番地

〒392-01

Tel 0266-58-5696

休館日：日曜日・祝祭日の翌日・年末年始

入館料：小・中学生50円 高校生以上100 円

交 通：諏訪バス 上諏訪駅発有賀経由大熊行
蓼宮橋下車徒歩5分

市町村だより

東部町における
埋蔵文化財保護行政の現状

東部町教育委員会 西沢 浩

当町における埋蔵文化財保護行政は、昭和57年度以降仕事量が増大している。これは農業基盤整備事業が約10年以上にわたり計画され、計画区域内には相当数の遺跡が含まれているためである。昭和58年度からは、これらの遺跡を保護すべく計画的な遺跡発掘調査が年々続けられている。本格的な遺跡発掘調査に先立ち、昭和57年度には町内遺跡詳細分布調査を実施した。この結果、町内には211の遺跡が所在し、また、古墳は現在既に全壊しているものも含め、43基が確認されている。今回の調査において、新しく確認された遺跡は約35遺跡を数え、古墳についても1基追加確認がなされている。この遺跡分布図が出来たことにより、埋蔵文化財の保護事業が、以前と比べ大変やりやすい状況となっている。この分布図は役場内関連各課はもとより、町内外の建設会社等にも配布し、遺跡の周知徹底を図っている。従来、知らず知らずのうちに、遺跡が破壊されつつあった状況が、少しずつでも改善されていくことを期待している。

役場関連事業については、関係各課との連絡により、比較的容易に事業内容を知ることができるものの、外部業者による開発事業に伴う遺跡保護には、問題点も多く残されている。遺跡分布図により指導はしているが、埋蔵文化財保護に対する一般の理解はまだまだ深いとは言えない。このような中で、昭和58年度からは、住宅等の建築の際提出される建築確認申請の段階で、遺跡内に含まれる建築については全て現地調査を行い、必要に応じて立合い調査を行ってきている。しかし、確認申請書のだされる前に造成工事が行われてしまい、現地に行ったときには、既に遺跡が破壊されていることが時々あったため、昭和59年度からは農地法3条および5条関係の農地転用申請の際にも、遺跡範囲のものについて、全て現地調査を行い工事の際の立合い調査も行っている。昭和58年度は、立合遺跡調査の際遺物等が出土したため、破壊する部分についてわずかながら発掘調査を行った。また、昭和59年度においては、個人住宅建築のための造成工事に先立ち、約1週間程度の発掘調査を行っている。過去2年間、工事の際の現地指導を行ってきたことで、従前とは違って、少しずつでも埋蔵文化財保護意識が芽ばえているのではないかと考えている。さらに理解を深めていくべく、



成立遺跡5号住居址検出状況

この遺跡分布図をもととして、できる限り早い段階で、協議を行い土中にねむる遺跡を保護すべく、体制を整えてきている。

昭和57年度以前は、文化財を主として担当する職員を置かず、他の教育委員会業務との兼任の中で行ってきた。この間、埋蔵文化財発掘調査は継続的には行われておらず、農業基盤整備事業、住宅団地造成等に伴う緊急発掘調査が単発的に行われていた程度であった。昭和58年度には嘱託1名が文化財業務全般を担当し、59年度には係員1名が増員され、埋蔵文化財発掘調査を含む文化財業務を2名で担当した。さらに60年度は、2年間発掘調査に携わった調査員を町の嘱託職員として、発掘調査専従の形で業務を進めている。年々担当者は増員されてきたが、各担当者が他の社会教育業務等との兼務であり、思うにまかせられない部分も残されている。以上のような職員体制の中で大規模工事に伴う緊急発掘調査を進めているが、まだまだ多くの問題が山積みされている。中でも特に、農業基盤整備事業は工事面積が広く、遺跡が全面で破壊されている場合が多い。遺跡の現状保存が難しい状況の中で、できる限り綿密な発掘調査が望まれる。しかしながら、期間的にも事業費にも限りがあり、広い遺跡の中の中核部のみの調査に終わりがちである。また、発掘調査のできる専門調査員の絶対的不足がみられ、特に最近多くの市町村で発掘調査が行われており、調査団編成が困難となりつつある。

埋文担当者にとっては、非常に厳しい現状ではあるが、埋蔵文化財保護に対する認識を日々新たにし、努力を続けることが肝要であろうか。

奈文研研修報告

縄文時代遺跡調査課程

調査研究員 春日 雅博

去る5月10日から5月21日まで、奈良国立文化財研究所において、「縄文時代遺跡調査課程」の研修があり、参加したので、その研修内容について報告とともに感想を述べてみます。

まず、どのような講義を受けてきたのかを、題目とともに、その内容について記すと、以下の様な豊富さでありました。

- 1 文化財の保護 (坪井清足奈文研所長)
- 2 世界の中の縄文文化(佐原真奈文研研究指導部長)
 - 世界の考古学の中に縄文文化を位置づけようとする試み
- 3 縄文時代研究の現状(小林達雄国学院大学教授)
 - 1) 縄文時代研究の回顧
 - モースの大森貝塚と縄文文化研究の原点
 - N. G. マンローのPrehistoric Japan(1911)の紹介と、日本列島における、旧石器時代文化存在予測と解明への取組み
 - 山内清男の人物史
 - 靫痕の考古学から自然科学を利用したミクロの考古学へ ex)プラントオパール
 - 2) 縄文時代研究のいくつかの問題点
 - 情報量としては最も多く含んでいる土器からいかに情報を引きだすか→型式・形式・様式の考え方
 - 縄文文化の起源は、どう捉えうのか。
 - 縄文時代における経済・農耕・直線の発展・波紋型進展・停滞していたか、安定していたのであろうか。
 - 縄文時代の社会について。集落とはどのように捉えることができるのか。集落の同時性とは、どこまでの事を指すのか。集落とはどこまでの範囲を示すものなのか。
 - ex●セトルメントパターン
 - 縄文世界を固有の個々の集落の総合として捉えるのではなく、土器様式と集団様式を関連させて考える方法、即ち「核領域-中領域-大領域」の考え方
 - 何をもって縄文文化の終焉と捉えるか。
 - 4 洞窟遺跡 (岡本東三文化庁文化財調査官)

- 研究史と洞穴の成因・形態・利用法・利用時期・古環境・調査方法
 - 5 貝塚遺跡(岡村道雄東北歴史資料館研究員)
 - 里浜貝塚を例に貝塚遺跡の概要説明
 - 6 埋葬遺跡(春成秀爾国立歴史民俗博物館助教授)
 - 埋葬・抜歯の風習(性の考古学)から縄文時代復元
 - 7 自然環境(那須孝梯大坂自然史博物館学芸員)
 - 縄文時代に於ける古環境の変遷
 - 遺跡包含層認定のための堆積物の見方
 - 低湿地性遺跡の調査法
 - 8 縄文土器の研究Ⅰ・Ⅱ(土肥孝・金子裕之奈文研研究員・主任研究官)
 - 9 集落遺跡の研究Ⅰ・Ⅱ(泉拓良奈良大学講師)
 - 1) 近畿地方における縄文集落
 - 2) 縄文時代集落研究の問題点
 - 集落とはなにか。
 - 集落の研究における時間と空間の問題点
 - 今後の展望
 - 10 民族学からみた縄文社会(大林太良東京大学教授)
 - 世界の各地からの民族例をもとに、縄文時代に迫っていこうとする試み
 - 11 東アジアの中の縄文文化(加藤晋平筑波大学教授)
 - 12 石器と骨角器(松沢亜生奈文研考古計画研究室長)
 - 13 鳥浜遺跡の見学(森川昌和若狭歴史資料館副館長)
- 以上のように、各分野の一流の方々ばかりを講師に迎え、内容も大変充実していました。今回の研修は、「縄文時代の遺跡」の実際の発掘に当たっての技術研修ではなく、縄文時代をどう捉えていくのかという、理論的・理想的な研修でした。

確かに遺跡を掘り上げるためのテクニックは、必要不可欠なものでありましょう。しかし、これだけでは十分とは言えないのです。遺跡を掘って土器を分類し、編年をつくる事だけではいけないと思います。その仕事を礎に、どう個々の人が縄文文化・社会を把握し理解するのか、ここが非常に大きな問題となり得るところであり、大いに議論されるべき点と考えます。そういう点からみれば、今回の研修で、様々な分野からの縄文文化への考え方を学ぶ事が出来、大変勉強になりました。しかしいくらトップの方々の理論とは言っても「仮説」にすぎません。「真実」は誰にも分かりません。前述列記した講義内容はそのまま我々の問題点となり得るのです。



32号住居物出土状態

富士見町

藤内遺跡

富士見町教育委員会 樋口 誠司

藤内遺跡は、八ヶ岳南麓に所在する井戸尻遺跡群のうちの一つで、縄文時代中期中葉の標式遺跡として知られている。

本遺跡は宅地造成に伴い、59年11月上旬から12月末日まで、対象面積700mの発掘を実施した。調査の結果、中期中葉の住居址10軒、墓壇280余基を検出するなど成果をあげた。

墓壇について 広場を中心とする環状集落の最も内側に群在する。壇内には土器の副葬品をはじめ、打製石鋬、打製石包丁、石皿、磨石などの生産用具が多く、の墓に副葬されていた。こうした多くの墓壇上には、拳大から人頭大の礫が10～30 cm浮いて存在していた。遺体安置後土饅頭に土を盛りあげ、その上に礫をおいたと推察でき、墓標の石と考えられる。それは礫の下を掘ると必ず墓壇になることから領けよう。また壇の縁には、直径10～15 cm 深さ30 cm くらいの柱状のピットが50個以上検出された。ピットの中には、炭混りの黒色土が詰まっているものが多く、中にはロームが詰まっているものがみられることから、トーテムポール様の木柱が建っていたと推察できる。

特に墓域で注意されるのは、壇と壇の間に直線状に並んだ土器が10個体検出されたことである。土器は底部を浅く掘り窪めて安定よく据えられ直立しており、転んでしまったものも数例みられた。これらは集落の中心に向かって並んでいた。

また32号住居址の上面、墓標石と同一面に直径56 cmもある大形の浅鉢、ミミズク把手付深鉢、石皿などを核に石器や土器片が環状に分布し、32号住居址を半ば覆うように出土した。完形土器は皆あい接して立って



中央広場と墓壇群

おり、墓壇の間に立っていた土器と同様の性格と思われる。しかし、周囲に墓壇が見当たらないことから、住居址を墓と見立てていると考えられる。

32号住居址について 上面の浅鉢等の土器を取り除き少し掘り下げると、住居址の落ち込みが確認された。この面には、厚さ約10 cm 直径1.8 mの焼土層が住居の中央にあり、蓋をしたかのような印象を受けた。焼土層を取り除くと、石器や土器が足の踏み場もないほどに散在し、この状態は床面まで続いていた(写真左)。こうした20個体以上の完形土器は、土圧で潰れたものと、横転して壊れたもので、意識的に壊されたものは見当たらなかった。

また、入口側からみて奥壁寄りの右側には、堆土上層から漆黒土が一部あり、その部分だけ土器の出土がみられなかった。発掘時には「この住居は縄文時代の民俗資料館だ」などの声も聞かれ、住居が廃絶したあとに土器が持ち運ばれ、木製品を纏め生活用具一式を埋葬した墓としての住居と推測でき、漆黒土の場所は、木製品を埋めたところと考えられる。

集落の構造と復原 環状集落の4分の1を調査することができた(写真右)。未発掘部分の推定も可能なので集落復原試みたい。

遺跡は大きな三つの遺構で構成され、同心円状に配置している。直径20mの正円の広場が中心に位置し、これをとり囲むように幅20mの墓域が回り、更に墓域に重なって外側に20mの住居域が回っている。三者は互いに相接し、世代や時代が変わってもそれぞれの領域を侵犯することなく、住居は住居、墓は墓として一定のきまりに基づいて営まれている。発掘した4分の1から集落の中心を求め線を引いてみると、それぞれの遺構は正円の中に収まっており、文字どおり古代中国の玉器にある「環」や「璧」のようであった。

宮田村

なかこし
中越遺跡

調査団長 友野 良一

調査員 小池 孝

天竜川右岸の大沢川と小田切川にはさまれた東西に長い台地上に位置する中越遺跡では、昭和31年の第1次調査以来、あわせて13回の調査が実施されてきた。その中で昭和53年第10次調査によって、遺跡の範囲は台地を南北に切る国道153号線を西限として東へ600mまでの間の台地上全面であり、その中の北西部が縄文時代前期の、南の小田切川に面した部分が縄文時代後期の、その間の広大な部分が縄文時代中期の遺跡地であることが確認されている。

昨年8月1日から9月13日まで、第1次調査地点の西30mで商工会館建設に伴う事前調査を実施した（第14次調査）。調査面積は800㎡であった。縄文時代前期の区域内であり、遺構が濃密に存在することは確認されていたが、結果としては住居址12軒、方形柱列の一部と思われるピット群1を検出し、特筆すべき遺跡として岩偶が出土したのである。住居址は中越期6軒、神ノ木期6軒であり、全体の中では神ノ木期の住居の多い地点と言える。平面形は隅丸方形を基本とし、多くは掘込みが深くて4本柱で中央に炭がちらばる程度の地床炉を持つが、古いものは掘込みが浅く内部施設も不明な点が多い。土器の資料は多く、いわゆる中越式と神ノ木式のローカルな土器が卓越する。東海系のオセンベ土器は比較的多いが関東系の関山式は少ない。石器は、大量の剥片類を伴って黒曜石類製の石鏃・石匙などが多数、硬砂岩・緑色岩類製の叩石（凹石）・先端研磨石器など、それにチャート製の磨製石斧・岩偶が出土している。

岩偶は104号住居址の炉北1mの床面に密着して出土した。長さ7.0cm厚さ0.5cmのチャート製で全体形は片刃の磨製石斧に似る。上方に頭部と腕を作出し、下端から両面中央に長い擦切を入れて脚部としている瑛状耳飾のように表裏があり、



岩 偶



岩偶伴出した遺跡

わずかにそっている。104号住居址から出土した土器はほぼ全てが中越式である。4個の小さな山状突起を持つ無文のものと、4個の波状突起から隆帯を垂下して斜格子目文を持つものがあり、中越式の中でも古い方に属すると考えている。炉の南70cmの床面には石鏃2・石匙1・石錐1・スクレパー3・小型磨製石斧1が置きならべたような状態であった。住居址は1辺約4mの隅丸方形で掘込みが浅く床面は軟らかい。炉の使用痕が顕著なこと、規則性はないが壁外を含めて多くのピットを伴うことなどは、他の住居址には見られない点である。

今回は広大な遺跡の一部に限定された調査であったが、12軒の住居址と共に中越期の岩偶の発見という成果を得た。明確な所属時期が与えられた岩偶そのものに高い資料性があるが、その出土状態や伴出遺物、出土遺構の特殊性などは、岩偶の性格やひいては当時の精神生活を検討する上での貴重な内容が含まれていると考えている。

中野市 ^{た がみてら まえ} 田上寺の前遺跡

中野市教育委員会 徳竹 雅之

本遺跡は中野市大字田上寺の前から字宮の前にわたり、千曲川に沿って細長く分布している縄文時代中期から平安時代にかけての集落址である。

今回の調査は、昭和60年度農村総合モデル事業倭北部営農飲雑用水施設整備事業による浄水場建設工事計画に伴い、昭和59年度に試掘調査の結果、建設予定地全域に遺物分布が確認されていたので、本年度は記録保存を目的として緊急発掘調査を実施した。

今回の調査は、金井汲次氏を団長に昭和60年4月18日～6月4日まで、約500㎡を発掘したが、期間中悪天候がつづき予想外の日数がかかってしまった。

調査はバックフォアによる表土剥ぎののちグリット



現地説明会風景

設定を行い、試掘結果をふまえてグリットのA・E・G各列に2m幅のトレンチを入れ調査を開始した。その結果、A列-1、G列-3か所の遺物集中状況が確認され、遺構との関連も明確になった。A列では下部に落ちこみをもつ集石遺構が2基、G列では同種集石遺構2基と落ちこみがなく他と比較して広範囲にわたる集石遺構が一群、そして住居址1軒が検出された。

A列の集石遺構の1基は、長軸2m20cm、短軸80cmを測り、隅丸方形に約10cm前後の厚さで角礫を積み重ねることなく、水平に一層敷き詰めてある。この集石の下にはほぼ同じ範囲に約20~30cmほどの深さの土壌が検出された。もう1基は後世の破壊が甚しく、消失した角礫が多いため、正確な数値はえられないが、大略長軸1m80cm、短軸80cm程度となり、前者とはほぼ類似した内容・構造のものと考えられ、時間的にもあまり差がないのであろう。

G列の集石のうち、土壌をもつ2基は調査区南東端に大小が並んで検出された。約15cm前後の角礫を、大形は長軸2m×短軸80cm、小形は1m20cm×50cmの範囲に方形に構築してある。集石下の土壌はA列例とはちがい、周囲に20cmほどの大形礫を埋め込んで壁をつくり、約30cmほど内部を掘り下げてある。

他の集石は前述2基の北4mにあり、上記4基の集石からほとんど出土しなかった土器片が多量に混在しており注目された。高坏・壺が中心で、わずかに小形の甕がある。また、土器片及び集石の分布も他と異なり、小単位の数基の集石が群を形成する状態が認められた。しかし下部に土壌はない。祭祀的色彩の強い遺構ではないだろうか。なお焼土・灰などはない。

G列検出の住居址は、調査地域北東部にあり、一辺約6m前後の隅丸方形プランを呈する。中央には地床炉があり、その周囲に径30mほどの柱穴4本が方形にある。住居址からは遺物がほとんど出土しなかった。

以上の集石や住居址は、伴出遺物がないものもある

が、遺跡全体から出土する土器やG列土壌伴出土器がすべて弥生時代後期のものであるとき、ほぼ同時期のものと考えてよいであろう。集石遺構の類例はあまり多くないが、近くでは中野市間山など数例がある。弥生時代後期の葬制など考える上で新資料を提供したものとしよう。

昭和60年度 中央自動車道 長野線発掘調査概報

(助)長野県埋蔵文化財センター

本年度の中央自動車道長野線建設用地内遺跡発掘調査は、塩尻市10遺跡、松本市7遺跡、合計17遺跡、面積185,200㎡の調査を目標に出発した。その後、県教委の遺跡範囲確認調査によって、塩尻市の竜神平、山の神、上木戸、松本市の下神の各遺跡は当初計画以上に遺跡範囲が拡大することが明らかとなり、また、松本市の中二子遺跡の一部が中央自動車道建設用地にまで広がっていることが確認された。

本年度の調査予定面積が185,200㎡といった膨大なものであること、中央自動車道の建設が、昭和62年度豊科ICまでの供用開始ということでヤマ場を迎えていることもあって、調査研究員、事務職員を昨年度の27名から57名へと大巾に増員し、発掘調査の万全を期している。

発掘調査は、4月はじめの諸準備にひきつづいて、4月22日から現場の発掘作業を開始した。

本年度の発掘調査には、いくつかの大きな課題があるが、その一つは、田川、奈良井川、鎮川に沿った沖積地に位置する遺跡が多く、山麓部や洪積台地の火山灰(ローム層)の堆積している遺跡に比べて、土質の変化が微妙であり、遺構の検出がきわめてむずかしいことである。

もう一つの課題は、梓川の扇状地に位置する新村・島立条里遺構の調査である。県内では今までに更埴市や長野市などで水田址の発掘調査が行われてはいるが、今回のような広範囲にわたる発掘調査ははじめてのことである。水田面の検出、調査方法、時期の決定などいろいろな問題が残されている。

さらにもう一つの課題は、発掘調査と中央自動車道の建設工事が並行して進められていることである。中央自動車道の早期開通は県民の願いでもあり、豊科ICまでの区間の大部分はすでに工事が発注されてい

る。そうした中で発掘調査と工事工程との調整をとりながら調査を進めなければならず、いろいろな問題が派生することが予想される。

4月以来、およそ3か月間の発掘調査の概要は次のとおりである。

- 1 **竜神平遺跡** 竜神沢右岸の舌状台地の先端部と南斜面に位置する。台地先端部では縄文時代早期の住居址が、南斜面では同前期の集石(写真)、焼土、平安時代住居址などが検出されている。
- 2 **山の神遺跡** 長野県畜産試験場の場地を中心とした遺跡で、中央自動車道は遺跡の西端を横断している。先土器時代のブロック、縄文時代中期住居址、土壌が検出されている。
- 3 **犬原遺跡** 大沢川左岸の台地に位置し、中央自動車道は遺跡の東端を通過する。縄文時代中期末から後期初頭の土壌8、弥生時代後期の方形周溝墓2などを検出し、調査を終了した。
- 4 **上木戸遺跡** 大沢川左岸の台地先端部、大原遺跡の北に続く。縄文時代中期住居址9、弥生時代住居址20以上などが検出されている。
- 5 **吉田川西遺跡** 田川の左岸、田川高校の対岸に位置する。昨年度にひきつづいての調査で、調査面積も広く、また、遺構が重複しているために遺構の検出に時間がかかる。平安時代の住居址80以上、掘立柱建物址3、中世・近世の掘立柱建物址2、火葬墓などが検出されている。出土遺物も多く、土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器をはじめ白磁・青磁などの輸入陶磁器、銅製帯金具などの各種金属器も出土している。
- 6 **神戸遺跡** 奈良井川左岸の沖積地に位置し、調査面積は40,000㎡におよび、しかも、度重なる河川の氾濫によって、地形、土層の堆積状況が複雑であり、遺構の検出がむずかしく、調査が難行している。平安時代の住居址、掘立柱建物址、土壌墓



竜神平の集石遺構

- などが検出されている。
- 7 **上二子遺跡** 神戸遺跡の北に続く遺跡で、平安時代住居址1を検出し、調査はほぼ終了した。
 - 8 **中二子遺跡** 奈良井川左岸の沖積地に位置する。奈良時代の住居址19、掘立柱建物址12、土壌墓10などが検出されている。
 - 9 **下神遺跡** 鎮川右岸の沖積地に位置する。中央自動車道の両側は、昭和58年に松本市教委によって発掘調査が行われ、多大の成果をあげている。調査面積およそ40,000㎡の4分の1ほどの遺構検出が終了したところではあるが、平安時代の住居址33、掘立柱建物址7、土壌10などが検出されている。
 - 10 **南栗遺跡** 梓川扇状地の先端部に位置する。現在、栗林神社の南側のC B建設地の調査を行っているが、平安時代の住居址、土壌などが検出されており、南栗集落にかけての広い範囲に平安時代の大集落があったと想定される。
 - 11 **新村・島立条里遺構** 新村・島立条里遺構は、梓川扇状地の先端部、およそ600haにわたるものと想定される。中央自動車道はこの中央部を南北に横断している。中央自動車道の用地内に100m間隔にピットをあけて、プラントオパール分布のサンプルを採取し、現在、宮崎大学農学部 藤原宏志助教授のもとで分析が行われている。

埋文センター日誌抄(昭和60年5月以降)

- | | |
|------|--|
| 5月2日 | 中島豊志氏(松本第一高校)遺物保存指導 |
| 7日 | 埋文調査調整会議 |
| 9日 | 長野放送吉田川西遺跡取材 |
| 10日 | 梅村弘氏(長野県農事試験場飯山試験地長)
神戸遺跡外の地質土壌調査指導 |
| 16日 | 藤原宏志氏(宮崎大)神戸遺跡外現地視察
指導 |
| 23日 | テレビ信州吉田川西遺跡取材 |
| 28日 | 長野県遺跡調査指導委員埋文センター及び |

長野線内発掘遺跡視察

- | | |
|------|---------------------------------------|
| 31日 | 第7回理事会(昭和59年度事業報告及び決算報告外について) |
| 6月7日 | 埋文調査調整会議 |
| 10日 | 楢崎彰一氏(名大)吉田川西遺跡遺物指導 |
| 17日 | 西沢寿晃氏(信大)大原遺跡外遺物指導 |
| 18日 | 松本市島立地区埋文調査説明会 |
| 25日 | 藤原宏志氏(宮崎大)プラントオパール分析
資料採取指導(29日まで) |
| 27日 | 全埋文法人連絡協議会総会(茨城28日まで) |